

(7) まち巡りの体験誘発による環境づくり支援 — 「九輪の台地」プロジェクト —

Environmental Semantic Initiation in Symbolic Urban Space
through Walking Event on 'NAVA-CAKRA' Hills

盛岡 通・ ○近藤 隆二郎・
by Tohru Morioka, Ryujiro Kondo

ABSTRACT: The viewpoint of semantic environment is essential for process oriented planning with citizen participation. Event management is one of the way to vitalize regional activities. Walking Event with trails and visiting points with an contingent mental image, which we called "MEGURI" can make an common image of neighbor environment. A sacred image of sun and reflected holy spots on Uemachi plateau was formulated in planning of the walking event. The results of questionnaire survey show that a posteriori vague image of the Uemachi environment has been transformed into a consintent conceiving of environment. Participants indicated many resources for upgrading neighborhood environment, being affected by a holly concept produced.

These results clarify that planning and manegement of the Meguri event is one of effective means for peoples to be aware of blessing and reaction from urban environment, in which they have various actions. This type of event was found to have potentiality of converting planning process into ones, which combine physical planning with samantic designing.

KEYWORDS: Semantic environmental design, Event manegement, Image communication,
Citizens participation

1. 研究の背景・問題提起

昨今、地域において「まちづくり」「環境づくり」において「〇〇祭り」に代表されるようなイベントが数多く取り上げられている¹⁾。それは、「もの」から「こと」への流れと共に、主催者にとっては市民・地域への共有意識・連帯感を深めるものとして位置づけられている。しかし、参加しただけでは自分の生活に結び付ける意識の育成がなかなか難しいのが現状である。

本研究は、身近な環境づくりには自分の住んでいる地域を再認識することがその手始めとして必要であることに重点をおき、その一つの型として「めぐり」型による環境づくりを取り上げる。「めぐり」型とは、イベントにおいて複数の場所を訪れることで、そこに内蔵する意味を重ねて特化させ、地域の像の共有化をめざす型である。

「めぐり」型の一例として、大阪市の上町台地において実施したイベント—「九輪の台地」—を取り上げる。このイベントの演出過程及びアンケート分析により、「めぐり」型の構成とともに有効性を述べる。

2. まちづくりへの市民参加におけるイベントの位置づけ

市民参加の重要性は、調査と計画立案のそれぞれの場面で焦点があてられる。まちづくりにおけるイベントの効用を市民側からみると、①新しいものの見方、考え方に啓発される、②意外性や白熱した話の展開がある「楽しさ」、③将来の行動・参加への期待感を高める、などである。参加型のイベントでは、まずは、参加者の意識が高められると共に、日常見慣れた地域を見直し、新たな認識を得られるのである。

ここで問題となっているのは、

a 参加者が体験を通して五感を働かせて地域を見直し、知識を刺激して新たな価値や素材を発見する機会をどのように提供するか、

b 地域を見直し、新たに発見した環境資源の素材やその価値について、人々が景や資源の背景にある意味

* 大阪大学工学部環境工学科 Dept. of Environmental Eng. Osaka Univ., Suita, Osaka 565, Japan

を見い出す脈絡づけの技をどのように提供するか、

c 個々人の観察や印象の中で、他の参加者と共通するものを読み取り、共通の認識を育てる技をどのように用意するか、

である²⁾。これまでの実践例としては、街かどコンテストとその展示、著者らの環境カルテ³⁾による身近な生活環境や子供の遊び場の診断などがある。とくに後者では意味の共有化こそが地域の環境づくりの基盤であり、行政の支援型の行動計画でもカギになっていることが実践^{4) 5)}のなかから明らかにされている。

3. 「めぐり」型イベントについて

3-1 「めぐり」型について

「めぐり」型とは、「巡礼」から名付けられたものである。「巡礼」とは、「旅や観光の持つ世俗性に超越性が加わったもの」であり、並列化された霊場を次々と歩いて回ることによって宗教的な「御利益」を体感する行動なのである。この「巡礼」において意味の共有化にむけて働きかける構造を「めぐり」型のイベントに移築することを試みる。ここで、「巡礼」における意味共有の構造には少なくとも三つの要素がある⁶⁾。

- ① 「周縁性」
- ② 「ゆかり性」
- ③ 「数のシンボリズム」

すなわち、この三つの組み合わせを「めぐり」の意味構造と仮説している。

3-2 イベントとしての「めぐり」の有効性

まず、最も強調されることは、都市の景や環境資源のあり方の背景にある意味の理解という点である。というのは、「めぐり」とは、そもそも背景に全体性（意味）を持っており、それは「ゆかり性」に基づく「意味」という世界からの地域のとらえ方を経験するものである。その視点に自らも立ち入ることで、日常見慣れた地域を見直し、新たな認識を得ることも多い。これは、環境づくりの〈掘り起こし〉から〈生かし〉の段階に当たる。イベントの特徴は「出来事は、地域の人々に新鮮な驚きを与える。あるいは、人々に非日常的な体験を強制する。それによって、これまで慣れ親しんで、何でも知り尽くしていると思われた自分たちの住んでいる地域の、隠れた構造を発見する。」⁷⁾ といえ、くらしは多面的であり、その舞台も多様な顔を持つ。地域の再発見は、その多様さに負けない切口の鋭さと概念構築の普遍性をともなう必要がある。すなわち、環境づくりのしかけ方の一形態としてイベントを構築する場合、企画者が明確なテーマを持った上で「めぐり」を有効に活用することができると考えられる。

イメージとして漠然としているものから、全体像としての「意味」を増幅させ、ときに非日常的体験を強制することで、参加者の目にある「眼鏡」をかけさせるのである。その「眼鏡」を通して見る地域は、イメージという文脈に合致するものが評価され、そうでないものは希薄化される。新たな価値づけの手引きをコンセプトにはめ込み、素材の発見・評価をしてもらうのである。

また、周縁に移動させて非日常体験を促すことは、「祭り」の儀礼のように、参加者個人のアイデンティティを地域において確認する（原始回帰）という意義をも持つ。

全体性としての意味を増幅させる上で、「数のシンボリズム」が有効であるのは、環境資源から浮き立たせた霊場（ポイント）を全く並列化し、その上下関係を認めないことで、かえって巡礼者の心をその並列をまとめるもの（全体性）に志向させるものであり、このことが意味の共有化に有効である。

4. 上町台地プロジェクトー「九輪の台地」

「九輪の台地」の目的は、上町台地がかつて持っていた歴史的、空間的な文脈を「めぐり」によってイベントとして設計し、ある抽出されたテーマ（意味）ー今回は「聖なる太陽」ーから見直すことによって再認識してもらうことを企画運営し、イベントの有効性を評価することである。同時に参加者に対してアンケートを実施し、どのようにイメージが変化したかを検証した。

4-1 上町台地とは

上町台地とは、大坂城の北端から住吉神社までの幅約2 kmにわたる北高南低の帯状の台地である。古代の大坂湾では、海の中に突出した岬をなした丘陵地帯であった。大阪最古の生国魂神社を始め、聖徳太子建立の四天王寺など歴史を持つ寺院が多く集まっている。これは、元和元年(1615)に始まる松平忠明の復興により市中及び近隣村の寺院を集め寺町が形成されたものである。平安遷都によって繁栄は一時さびれるが、四天王寺西門が中世以来浄土信仰の霊地として賑わった土地柄を反映して、四季の花見を兼ねた寺社巡りや

月見、夕涼みなど大坂町人の奥座敷的な行楽地となり、三郷の豪商が好んで別荘をここに求め、文人墨客また草庵を営んで想を練るなど、上方文化の故郷ともなった地域である。この門前町の西端、高台の崖に沿う一帯は日想観修行の霊地であると共に逢坂、天神坂、愛染坂、口縄坂が崖下と通じ、天王寺七名水の多くもここに集まる景勝地で名所旧跡も多い。しかし、現在では、訪れる参拝者は数少ない。また、生国魂神社周辺はラブホテル街になりつつあることなど、現在の大阪の人々にとってやや忘れられた存在になりつつある。

4-2. 本イベントのコンセプト—意味の演出過程⁹⁾

上町台地は歴史的に大阪の人々にとって聖であり、くらしの「周縁性」であり、台地としてまれな地であり、空を最も意識しやすい非日常的空間を形成してきた。その非日常性を再構成するために、中心に「太陽」を持ってくる。今回のイベントの意味（主テーマ）である。四天王寺西門における「聖」のクライマックスである落日の浄土信仰と共に、「夕陽ヶ丘」という地名性、さらには台地の持つ地形性から夕陽が見える眺望を確保できるので、「太陽」という軸で統一感が出せるものとした。

次に、その意味を体感する場（霊場）を設定しなければならない。「めぐり」場である。四天王寺西門の夕陽—春分の日—が最大の「聖」なる日であり、それにあわせて生国魂神社から四天王寺までのひとの歩く道（巡礼）を設定する。太陽（落日）を捉えるポイントとしてその地理的条件とゆかりの源泉として歴史的解釈により9ヶ所を設定する。

- | | | |
|---------|--------|--------|
| ① 生国魂神社 | ② 青蓮寺 | ③ 珊瑚寺 |
| ④ 家隆塚 | ⑤ 勝鬘院 | ⑥ 大江神社 |
| ⑦ 清光院 | ⑧ 安居神社 | ⑨ 四天王寺 |

この9ヶ所（九輪）を霊場として太陽を見るために歩くコースを設定する。

ここで重要なことは、各ポイント独自の持っているイメージと設定された意味（太陽）とのつながりである。全く関係のないものをつなげて意味の解説にはつながらない。今回の場合、地形的には各場所から「落日」が見ることが出来るということをも最重要に選んだので、眺望点としての「太陽」とのつながりはあるが、出来るだけ各寺社の持つ縁起・ゆかり等に沿った中で「太陽」との接点を探した。例えば、一番の霊場である生国魂神社では、祭神として生島神と足島神をまつり、西の海に向かつてのハラヒである八十八島祭を切り取った。八十八島祭は冬至新嘗の太陽回復につながるものである。第四番の家隆塚では、藤原末期五代の天皇に仕えた有名な歌人家隆が、官を辞した後、この地に庵をつくって隠棲した。彼岸に西の海に沈む夕陽をみて、「契りあれば にはの里にうつりきて 波の入日を拝みつるかな」という歌を詠んだ故事にゆかりをもとめるなど、「太陽」とのつながりを強調し、次のような霊場名をつけた。

第一番 生国魂神社	八十八島祭……冬至新嘗の太陽回復……	太陽へのハラヒ	入口としてのハラヒ
第二番 青蓮寺	大日如来……ササクリで「太陽の子」……	太陽のシンボル	太陽の象徴
第三番 珊瑚寺	十一面観音……ありとあらゆるものに光を注ぐ……	太陽の力	太陽の力
第四番 家隆塚	家隆の歌……夕陽……浄土……「根の国」……	人々の宇宙観	太陽のコスモロジー
第五番 勝鬘院	聖徳太子建立の施薬院……愛染明王……	太陽による恵みの世界	太陽の世界
第六番 大江神社	豊受大神……あらゆる産業の神……	太陽によって生きている	太陽の恵み
第七番 清光院	もと有栖川寺……御ハラヒ所……	太陽の前で自己をなくす	悟りへのハラヒ
第八番 安居神社	少彦名命……オオムナチの相棒で国造りの神……	太陽の創造	宇宙の根源
第九番 四天王寺	浄土信仰……太陽……天そして空……	すなわち原点である	原始の鼓動

この霊場名をつける場合には、各霊場の持つ「ゆかり性」と共に「めぐり」の必要な要素の一つである「名数の設定（数のシンボリズム）」がある。今回は「9」という数字であり、これは移動する距離とポイントとの関係、あるいは各霊場の持つ素材性から選ばれたものである。しかし、「めぐり」とするにはこの「数」の意味、なぜ「9」を選んでいるのかを位置づけなければならない。

テーマが「太陽」であり、かつ各素材は宗教的なものばかりであるから、「9」という数字を宗教的な世界から位置づけた。「聖なる太陽」ということで「巡礼」としてのつながりを考えると、「死と再生の旅」である巡礼は、自己覚醒の儀礼とも呼べるのである。そこで、「タントラ(Tantrism)」における「九輪(NAV A-CAKRA)」を用いる。これは、九つの輪からなり、個人が自己に直面し、そのなかに真実—宇宙を見い出す瞑想の手段として用いられ、宇宙の創造を示している（集印帳のデザイン参照）。外から内の一点に向かっているつながりを九つの霊場間に取り入れる。すなわち、霊場名にも1から9まで、悟りを開いて真実へとたどるような名前をつけ、「みち」としての連続感・一体感を表現した。

以上により、「太陽」という意味と各霊場がつながり、「めぐり」における「数のシンボリズム」・「ゆ

といった「地形」の要素、さらに自然的な要素で漠然と捉えられていた。しかし、イベントで歩いた後は、そこにも人が住んでいるといった「俗」なる要素として「ラブホテル」「マンション」「電信柱」などが目につくといった具体的な指摘が多かった。それは、「地形」においても単なる高低差のある「台地」という表現から実際の坂空間の評価あるいは眺望・景色としてどのような対象がよいといった具体像の記述に変わっていることからわかる。ある意味の体系のなかで空間を歩いてみると、その意味に合うものは強化され、合わないものは希薄化される（見えないということではない）ことがわかる。イベント終えた参加者にとっての「上町台地」という言葉から浮かぶイメージは、「四天王寺西門からみた夕陽」や「大江神社からみた町並み」といった空間画像として浮かぶのであり、「聖なる上町台地」といった分脈においては、その価値や素材を具体的に述べるのが可能となる。

5-2 各霊場での演出

5-1で全体像に関して具体像の記述への移行を述べたが、その場所（ポイント）としての各霊場の空間がどのように評価されたかである。入口としての生国魂神社と最後のクライマックスとしての四天王寺は、この「巡礼」の時間を区切るものであるから、「聖なる場所」としての評価は高い。また、夕日を見る視点場がわかりやすい霊場はおおむね評価が高い。家隆塚や大江神社は、舞台や小山があるところで、そこで夕日を見ろという行為への誘導が分かりやすかったのが評価を高めている。また、「手鏡」によって太陽の光を反射させて遊ぶ仕掛けを用いた大江神社は、景色として「愛染坂」「夕日」「町並み」「崖に下の静かな林」といった、バラエティに富んだものが選ばれている。これは、視点場の良好な条件と共に何らかのしかけによって滞在時間を長くし、独自の特徴をもたせることが、心の中に残ることにつながるのである。歩いてもらうことに、さらに遊びを強制することもひとつの技である。

また、安居神社においては視点場としてはビルやマンションが立ちふさがり、眺めからの評価は全くなされていないのにもかかわらず、神聖な雰囲気として評価されている。それは、境内に9枚のパネルを展示して、イベントのコンセプトを説明し、「聖典」としての役割を果たしたことと、クライマックスの四天王寺への道として参加者を送り出すという1番から8番までの区切りとして評価を受けたのである。

すなわち、霊場を意味の体系の上からは「太陽」という軸で並列化したのであるが、その上で霊場としての独自の演出があればそれなりにイメージを誘導できる可能性もあるのである。特に、参加者が五感を働かせるような仕掛けは、与えられた意味からの価値や素材を発見することに効果がある。

5-3 各霊場のつながり－「みち」－

では、それらのポイントをつないだ全体のつながりはどう思われたのであろうか。九つの霊場を順に設定したコースを歩いてもらったが、「集印帳」によってスタンプを集めながら歩いたことにより、参加者は全体を一本の「みち」として認識できた。アンケートにより「今日歩いてきた道に名前をつけるとしたらどのようなものが良いでしょうか」と尋ねると、「今日と明日を考える道」「時の道」「夕陽ヶ丘の巡礼古道」といったものが語られ、「聖一太陽」からのコンセプトからの地域像づくりが一定の成果を収めていることがわかる。「集印帳」が九つのポイントのつながりを認識させるのに効果があったのは、好意的に受け入れられたことから分かる。また、つながりという道の認識は、それだけにとどまらずに、線から面としての台地の像の形成にまで至るのである。

5-4 仕掛けについて

「霊場」であることを示すオブジェは、「霊場と呼ぶには無理がある」という指摘もあるように、カラーボックスに布を掛けたものにスタンプ（印）と「香」を炊いた簡単なものである。これは、台地の空間そのものを大規模に変化させてしまう「遊園地」のような異次元空間ではなく、各参加者の心を刺激し、その変化に頼って空間に接してもらうという姿勢を持つものである。それががけあって参加者に対していろいろと想像させ、五感・知識を働かせて「まち」そのものの理解・解釈を促す機会を与えることになった。

「手鏡」はテーマである「太陽」の光を反射させて「太陽との会話」を象徴したものであったが、その意図はあまり伝わらなかった。しかし、この仕掛けは各霊場のなかでも大江神社の演出に独自性を強め、印象深いものにし、それは、聖なる空間としての評価が高いことにもつながるのである。

「鈴」は各参加者に身につけてもらったものであるが、その音は歴史という寺町の雰囲気にもあっているため違和感はなかったようである。さらに、周囲への異化作用とは裏を返せば、共に巡礼をしている人々の間での連帯感を形成するものになり、見ず知らずの参加者の間で活発に会話が交わされた。

霊場における「香」の演出は、「安らぎを感じた」という声もあり、日常ではない歴史－過去とのイメージの上に成立する心意を強化するものであった。また、各霊場に仕掛けてあることから、つながりという

統一感を出すことにも寄与した。

5-5 まとめ

以上、いろいろな仕掛けが効果的に働いていたことを示したが、それは今回のイベントが「聖・太陽」化らのコンセプト・意味の構造が明確であり、その分脈から現実のまち、あるいは過去の姿をイメージさせる刺激・機会として位置づけられるからである。「歩く」ことは参加姿勢として人の五感を刺激する前提であり、まちを一人一人の肌で感じることでできる行為である。さらに、(鑑で)遊び、(パネルを)見るといった行為を参加者に強制することは対象地域への像の形成をより強く促すことに有効であることがわかる。上町台地の今後の姿について「これ以上俗にならないで」「マイカーの乗入れ禁止」「寺は生け垣・木立を」というような規制・整備案から、「名水による茶店や庵などの設置」といった将来への提案まで生まれてきているのである。

6. 考察・課題

上町台地は、歴史性が高くかつ起伏に富んだ地形を持つといった豊かな要素を持ちながらも、現実にはそのことが有効に活用されない、それ以前に人々にとって認知されていない空間である。この空間において「めぐり」型イベントを行った。その結果、上町台地の持つ環境資源としての素材や価値さらにはその背景にある意味を再認識し、その視点から実際の空間の評価・発見が行われた。それは、上町台地の将来像を作り上げていく上での市民の意識を高め、意味の共有化にまで到達する機会を与えることになるのである。

つまり、「めぐり」型イベントはまちづくりにおいて市民の地域に対する関心を高めることに有効である。それは、風致地区行政のように規制の枠で囲ってしまうことでその後のアフターケアが見られない地区においても、市民の関心を高め、意味を共有することで将来像を構築するといった再活性化のプロセスの中に位置づけられるのである。また、市民の五感・知識を刺激することは、一人一人の持つ「直感」を大切にすることにもつながる。イベントの利点としてはそのソフト性があり、舞台としては原則的にどのような地域であっても有効である。コンセプトが多面的な日常に切り込むことができるものならば、市民を動かすことは可能であろう。

今後の課題としては次のようなものが挙げられる。

①「めぐり」型イベントの流れ(掘り起こしから生かしへの段階)を一般化する必要がある。それは、イベントの対象となる空間が潜在的あるいは顕在的に持つ要素をどのように抽出し、意味の体系を設定するかということである。さらにその体系からの環境認知を助けるものとして、仕掛けをどのように設定したら良いか、ある程度の枠組みが必要である。

②イベントに参加していない地域の住民にとっては「めぐり」型イベントはどのような刺激・効果があるのかを考察する必要がある。イベントというのは原則的に自由参加であり、必ずしもその地域の人々が参加するとは限らない。むしろ無関心であった市民にとって、関心を生み出すきっかけとしてもこの「めぐり」型イベントが意味を持つという仮設である。「見ること」でどのように刺激を受けるのかという視点でイベントを評価しなければならない。

③まちづくりの流れの中で「めぐり」型イベントを位置づけなければならない。「めぐり」型イベントは一回で終わるものではない。与えられる意味を何回も変えることで、それに伴う地域像がいくつも形成される。そのいくつもの地域像を重ね合わせることによって将来像が初めて形成される。このプロセスを確立しなければならない。

参考・引用文献

- 1)盛岡通;身近な環境づくりを支援する環境社会システム,第1回環境システム研究,VOL16,1988.pp34-40.
- 2)浦口醇二・大坂谷吉行;住民参加による景観調査・計画の試み,都市計画No.138,pp95-100.
- 3)盛岡通;身近な環境づくりー環境家計簿と環境カルテ,日本評論社,1986.
- 4)滋賀県;地域環境計画に関わる身近な環境づくり調査報告書,1986.
- 5)小幡範雄;環境の意味共有化を考慮した住民参加方式,第15回環境問題シンポジウム講演論文集,1987.pp79-84.
- 6)近藤隆二郎;1990年度大阪大学修士論文草稿(作成中)
- 7)大谷英二;地域イベントと地域振興,都市問題研究428号,1986.pp27-39.
- 8)くわしくは、近藤隆二郎・盛岡通;場所の固有性からみた地域空間の解釈と再構成に関する研究,第13回土木計画学研究発表会,1990.